# 半過去形理解のために
## ——本質的機能確定のための予備的ノート——

市　川　雅　己

現代フランス語の直説法半過去形については、おびただしい数の論考が存在するが、その本質的機能については未だ決定されるに至っていないといわざるをえない。何れの説も言語的直感に基づいており、すべてとはいえぬまでも部分的には正しいのだが、諸説が錯綜する中、ある説の概念が別の説ではどのように翻訳されうるのかも判然としない場合が多い。

半過去形を考察する立場には、これを過去時制の一つとする見方と、本質的には過去時制ではなく、より抽象的な機能が、ある文脈で過去時制であるかのように発現しているにすぎないという、大別して２つの立場があることはよく知られている。前者の立場にたてば、所謂「法的用法」は過去時制としての機能の拡張ということになるし、後者の立場では、この動詞形がある文脈では過去時制として、別の文脈では婉曲や愛情表現等を表わすものとして発現するということになる。何れの立場が正しいかは、少なくともこの動詞形を共時的に扱う以上は決定できず、何れかの立場を公理的に証明無しに認めざるをえない。２つの立場の優劣は、半過去形の多岐にわたる用法をどちらがより整合的に説明しうるかにかかっているのである。

筆者は既に市川（1988）において後者の立場にたった半過去論を萌芽的にではあるが展開している。ここでは後者の半過去形＝「非過去」説の系譜を辿り、研究の現状と問題点とを考察する。

### １．半過去形＝「非過去」説の系譜

上記２つの立場の内、後者の立場である半過去形＝「非過去」説の主要な論

考を検討する。

a）DAMOURETTE, J. & PICHON, E.(1911-1950)：toncal pur

非過去説の嚆矢といえよう。彼らは時制とは疑似的目録(pseudo-répertoire)にすぎず、真のrépertoire は 1) Actualité、2) Temporaineté、3) Enarration の3つであるとする。この内、1) Actualité で actuel であるとは durée vécue を有し durée の中にあると感じられることであるという。2)、3) にはここでは触れる余裕が無い。1) Actualité には Actualité noncal / toncal (<*nunc* / *tunc*) の対立があり、noncal は話者の moi-ici-maintenant を起点とするもの、toncal はそうでないものをいう。これらの概念を用いて彼らは半過去形を toncal pur であると規定している。[1] 彼ら独特の造語を用いた概念は理解しにくいが、半過去形が非過去であるとおそらく最初に指摘したことはその鋭い語感と共に特筆に値しよう。

b）DUCROT(1979)：thème / propos temporel

よく知られているように、彼はまず thème temporel / propos temporel なる概念を導入する。通常の thème / rhème の概念と同様に、thème temporel とはそれについて述べられる時間的要素、propos temporel とは thème temporel について何事かを述べる要素である。例えば複合過去形がなされた行為を1回性のものとして述べるのに対し、半過去形は propos temporel として thème temporel を性格付け (caractériser) し、その属性を述べる機能をもつとする。

(3)、(4)の複合過去形 / 半過去形の差異は(1)、(2)の差異と類似のものとしてとらえられるのである。

(1) Pierre a volé.

(2) Pierre est un voleur.

(3) L'année dernière à Paris, il a *fait* chaud.

(4) L'année dernière à Paris, il *faisait* chaud.

(1)がある時点での Pierre の行為を1回性のものとして述べているのに対し、(2)は Pierre を全体としてとらえ「泥棒」の属性をもつことを示しているのと同様に、(3)は昨年のある時点でたまたま暑ければよく、寒い日が有ってもかまわず、昨年の平均気温などは考慮の外であるのに対し、(4)では、thème temporel である L'année dernière の属性が propos temporel である半過去形で述べられ、昨年は全体として、つまり平均気温が高かったことが述べられているのである。

これは仏語母語話者のみがもちうる語感に基づく分析であり、半過去形の本質の一端をいい当てていよう。所謂法的用法は当初から考慮の外におかれており、半過去形＝過去説にたっているように思われるが、半過去形が属性を付与すると考えられる点でその射程は広く、半過去形＝非過去説にも通ずるものである。

c）Le Goffic(1986)：non-présent - inaccompli - certain

彼は明確に半過去形＝「非過去」説にたち、1）事行の定位（repérages）、2）アスペクト、3）モダリティの3つの次元で、半過去形をそれぞれ現在形、単純過去形、条件法と比較し、1）事行の定位の次元で現在形と（non-présent / présent）、2）アスペクトの次元で単純過去形と（inaccompli / accompli）、3）モダリティの次元で条件法と（certain / incertain）対立するという整合的な体系をなしているとし、半過去形の機能を non-présent - inaccompli - certain と定めている。

半過去形＝「非過去」説をはっきりと打ち出した点で評価されるが、半過去形のアスペクトを inaccompli としている点で、現在形同様、半過去形のアスペクトを無限定とする後述の LEBAUD や現在の筆者の立場と異なる。

d）市川（1988）：「指示空間の構築」

筆者は半過去形の機能を、発話空間（moi-ici-maintenant）と隔たった位置に発話空間と相似の「指示空間」（coordonnées）を構築することであるとし

た。この空間が時間的に隔たった位置に構築されれば、半過去形は過去時制として発現することになり、時間的な隔たりでない別の隔たりをもてば婉曲等の法的用法として発現することになる。

e）阿部（1989）：「異質なファクター」

半過去形が histoire にも discours にも現われることはつとに指摘されてきたが、ここでは特に次のような dicours 中の半過去形が取り上げられ、半過去形により構築される均質の事行に「異質なファクター」が介入すると説明される。[2)]

(5)　（人が来て）　Je t'*attendais*.

(6)　（見つけて）　Ah! vous *étiez* là.

(7)　（京都出身と聞いて）　Je vous *croyais* originaire de Tokyo.

阿部は次例のような、従来の基準点による概念では説明できない、半過去形が複合過去形の表わす時点以前の時点を述べる用法も、「異質なファクター」が言語文脈内にも現われうると想定することにより、統一的に説明可能であると主張している。

(8)　Des protestations se sont élevées là où on *ne* les *attendait pas*. (se sont élevées が「異質なファクター」)

(9)　Notre société est arrivée à obtenir les résultats qu'elle *espérait*. (est arrivée à obtenir が「異質なファクター」)

更に、b）Ducrot(1979) で述べた thème temporel 以外の時点を半過去形は関知しないことから、「異質なファクター」で終点のマークされる期間を thème temporel と同一視し、histoire / discours に現われる半過去形を統一的に扱うことの可能性を示唆している。

「異質なファクター」は原始的な概念ではなく、半過去形の機能及び文脈か

ら構築された「結果」であるに違いないが、Ducrot の thème temporel との関連性を主張し、histoire 中の半過去形のみならず、等閑視されていた discours 中の半過去形をも統一的に扱う可能性を示したことは評価される。

f）春木（2000）：「属性付与」

半過去形の機能が「属性付与」にあるとする、一見奇異に感じられる説であるが、b）Ducrot(1979) の、半過去形が propos temporel として thème temporel に属性を付与するという説の拡張と考えられよう。

(10) J'ai rencontré un réfugié qui *arrivait* du Kosovo.

(11) Elle *sortait* à peine du couvent lorsqu'il la demanda en mariage.

(12) Un pas de plus, je *tombais*.

(13) A cette époque-là, je *passais* chez ma tante tous les soirs.

(14) Je me secouai, outré de colère contre lui, je répondis sèchement: «je vous remercie, mais je crois que j'ai assez voyagé: il faut maintenant que je rentre en France». Le surlendemain, je *prenais* le bateau pour Marseille. (Sartre, *La nausée*)

(15) Avec un sifflement, la lame du poignard *fendait* l'air, *s'abaissait*. Il y eut un choc sourd, un cri planitif, puis le corps de Barzum *s'écroulait* en arrière.

例文(10)のような関係節中の半過去形は先行詞に属性付与を行ない、例文(11)のような「直前に完了した事態の結果残存を表わす用法」の半過去形、例文(12)のような反実仮想を表わす半過去形[3]、例文(13)の反復習慣を表わす半過去形、例文(14)の断絶の半過去形、例文(15)の絵画的半過去形は何れもその主語に属性付与を行なっているとされる。「直前に完了した事態の結果残存を表わ」したり、反実仮想、反復習慣を表わしたり、断絶の半過去形や絵画的半過去形として現われたりするのは、無論文脈に依存しているのである。ただし、断絶の半過去形の変種である次例、

(16)（ニュースの冒頭で） Il y a 14 ans, le 26 avril 1986, un réacteur de la centrale nucléaire de Tchernobyl en Ukraine *explosait*. (26. 4. 2000, France 2)

(17)（見出しで） Le 14 juillet 1972 *disparaissait* M. Fernand Pigelet.

(18)（同上） Il y a 100 ans *naissait* Franz Kafka.

では、属性付与されているのはその主語ではなく、文頭の時間表現であるとされている。

b）Ducrot(1979) を連想すれば、半過去形の機能が「属性付与」であるという考え方は理解しやすいものであるが、「属性付与」される要素が先行詞、主語や時間表現と文脈により様々である点が気にかかる。半過去形は半過去形の構築する「認識空間」（春木の用語）[4] に「属性付与」する、換言すればその属性を有する「認識空間」を構築すると考えれば上記を統一的に説明できるのではないかと考えられる。[5]

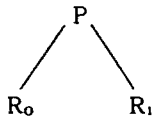
2．Lebaud の半過去論：double repérage

重要な考え方であると思われる Lebaud の double repérage 説を Lebaud (inédit) により概観する。この考えの特徴は、直説法半過去形のみならず同一の活用語尾を含む直説法大過去形・条件法現在第1形・条件法過去第1形をも統一的に説明しようとする射程を有している点であり、この活用語尾の機能は2つの基点、$R_0$、$R_1$ からの2重の定位操作を受けるということである。

(19) Le paradigme des désinences *ais, ais, ait, ions, iez, aient* marque qu'un procès P fait l'objet d'un double repérage : une valeur (p ou p') de P repérée par un repère $R_0$ fait l'objet d'un repérage par un repère $R_1$.

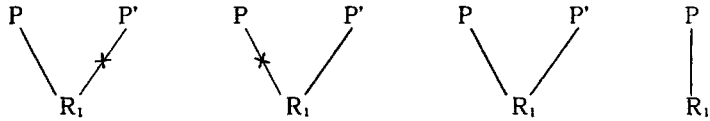
基本図式として下図を考える。

(20)




活用語尾 *ais, ais, ait, ions, iez, aient* のもつこの機能は2種の variation を生じ、その第1は次の variation interne であり図式から直接に理解される。事行の成立／不成立を P/P' とすれば、基点 $R_1$ から P/P' の何れに至るかの可能性は次の4通りである。

(21) variation interne




第2に、事行の意味特徴と文脈とから次の variation externe が設定される。ここで T、S は時間的・状況的基点 T ($T_0(Sit_0)$[6]あるいは$t_1$, $t_2(Sit_1, Sit_2)$)、主体的基点 S ($S_0/S_0'$, L)[7]であり、論理的には以下の4種が想定される。同一の活用語尾を含む直説法半過去形、同大過去形、条件法現在第1形、条件法過去第1形の何れもが4種すべてを許容する訳ではないが、半過去形は上記4種すべてを許容する。

(22) variation externe

1. $R_0(T)$ / $R_1(T)$
2. $R_0(T)$ / $R_1(S)$
3. $R_0(S)$ / $R_1(S)$
4. $R_0(S)$ / $R_1(T)$

この考え方の特色は、異質な T、S を基点 $R_0$、$R_1$ として統一的に扱う点にある。

以下、順に概観しよう。

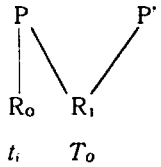
1．$R_0(T)$ / $R_1(T)$

(23)　Ce matin, à Besançon / quand je suis sorti, il *pleuvait*.

(24)　Tu sais le temps qu'il fait à Morteau ? / Non, mais ce matin, à Besançon, il *pleuvait*.

これらは次のように図示される。

(25)

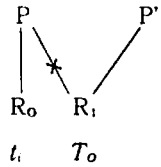



時間的な基点 $R_0$ (= $t_i$ = Ce matin, à Besançon / quand je suis sorti) においては雨が降っていたが、基点 $R_1$ (= $T_0$) においては文脈により両方の可能性 (pleuvoir / ne pas pleuvoir) があるということである。

以下、同様に例文における操作を図示すると次のようになる。

(26)　Ce matin, à Besançon, il *pleuvait* et maintenant il fait un temps splendide / et maintenant, voilà qu'il neige !

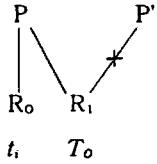
(27)




この場合には、$R_1$ (= $T_0$) における P (pleuvoir) の成立が否定されている。

(28)　Tiens, il pleut !? / Il *pleuvait* déjà quand je suis sorti, ce matin.

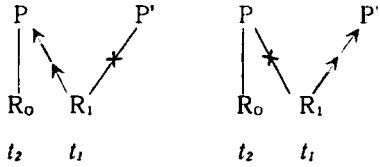
(29)




例(28)では逆に $R_1$ (= $T_0$) における P' (ne pas pleuvoir) の成立が否定されている訳である。

(30)　(et) deux jours plus tard, Claudine *achetait* la maison.

(31)

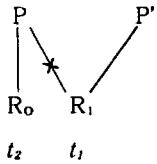



récit を締めくくるために imparfait de clôture 等と呼ばれる半過去のこの用法では、$R_0$ (= $t_2$) は2日後の家を買った時点であり、$R_1$ (= $t_1$) はそれより2日前の時点である。

$R_0$ (= $t_2$) における Claudine による家の購入は、$R_1$ (= $t_1$) の視点からみられていると考えるのである。[8] このとき文脈内で、$R_1$ (= $t_1$) における家の購入が有りうる、確からしいまたは望ましいこととして構築されているか、不確実な、不可能なまたは疑わしいこととして構築されているかにより上記(31)の2つの図式が有りうるのである。[9]

(32)　Comme les armées dirigées par Kabila approchaient de Kinshasa, Mobutu dut se décider à fuir le Zaïre, il trouva refuge, non sans difficulté d'ailleurs, au Maroc. Quelques mois plus tard, il *mourait* d'un cancer dans un hôpital de Casablanca, abandonné de ses amis de trente ans et plus...

(33)




この場合は、$R_1$ (= $t_1$) において Mobutu の死は全く予期されず、$R_0$ (= $t_2$) における単なる偶発事と解釈されるので、図式は上記のようになる。

(34) Quand Virginie est partie, Paul *pleurait*.

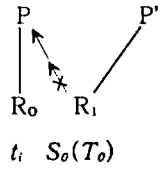
(35) Sophie a dit qu'elle *venait* en voiture.

例(34)(35)も同様に記述されると述べられている。

2．$R_0$(T) / $R_1$(S)

(36) Ah non ! Demain soir, il y *avait* un bon film à la télé.

(37)




触れられれることの比較的まれな興味深い例である。$R_0(t_i)$ (= Demain soir) にいい映画が放映されることになっているのだが、所用で観ることが出来ないことを $R_1(S_0(T_0))$ において口惜しがっているのである。このような場合、Ah non !、Zut! 等の感投詞がほとんど常に共に用いられることが指摘されている。

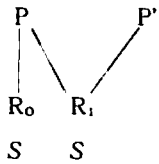
これに対し、

(38) Ah non ! Demain soir, il y *a* un bon film à la télé.

は、単なる事実の確認に留まっている点で異なるのである。

3．$R_0(S)$ / $R_1(S)$

(39)




この範疇に属する例の特色は如何なる時間表示も持たないという点で、上記のように図示される。$R_0$、$R_1$ は発話者または共発話者（énonciateur / co-énonciateur または locuteur / interlocuteur）[10]となる。

(40) politesse

Je *voulais* te dire quelque chose pendant que nous sommes seules.

(41) hypocoristique

Il *faisait* de grosses misères à sa maman, le vilain petit garçon.

(42) mépris

Elle a des yeux bleus, que votre mari n'*avait* pas.

Et lui, qu'est-ce qu'il *voulait* encore !?

(43) imparfait «forain»

Et la dame, qu'est-ce qu'elle *voulait* ?

(44) malentendu

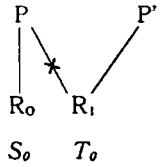
Excuse-moi, tu (me) *disais* quoi ?

これらの例は何れも «décentralisation» という考え方で扱えそうである。[11] (40)

での発話者、(41)での所謂共発話者[12]、(42)での話題の人物、逆に客に対する敬意表現とされる(43)での商店の客[13]、あるいは(44)での共発話者は、何れも発話者Sの場から décentraliser されていると考えれば、これらの用法を統一的に扱うことができよう。

4．$R_0$(S) / $R_1$(T)

(45)




このタイプは、主体の表象 (représentation subjective) P が、時間的に定位された状態 (état de chose) P' と対立している場合である。

(46) Une minute de plus, je *manquais* mon train.

(47) (Ah, au fait), J'*oubliais* de te dire que Delphine avait son nouveau violoncelle.

(48) Poirée ne *manquait* pas la dernière cible, il était champion du monde.

(46)(48)の様な反実仮想や(47)のような「気付きの半過去」がこれに当たる。半過去形におかれた行為は何れも実現しなかったのであり、$R_0(S_0)$(= $t_1$) は $R_1(T_0)$ から構築された、話者の fictif な基点を表わしているのである。

最後に今後考察すべき用法として夢の描写に現われる半過去形が挙げられている。

(49) récit de rêve

Dans mon rêve, je *marchais* dans une vaste forêt aux arbres feuillus, élevés et d'un vert sombre, j'*avançais* à vive allure sur un chemin pourtant un peu boueux, je n'*étais* pas seul, quelqu'un me *suivait*, une

personne dont le parfum m'*était* familier,...

## 3．結論に代えて

以上、半過去形＝非過去説を概観してきた。市川（1988）で主張した半過去形の本質的機能である「指示空間」の構築や春木（2000）の「認識空間」の構築という考え方は、「空間」という模糊としたものを設定せずとも、LEBAUD (inédit) の「2重の定位操作」という考え方に還元されうるものかもしれない。LEBAUD 自身もこの説の改良に取り組んでいると聞く。従来の諸説がこの考え方でどのように翻訳可能なのか、今後、細部にわたる考察を深めたい。[14)]

### 注

1）この考え方では現在形は原則として actuel であり noncal であるということになるが、現在形の用法には不変の真理を述べる現在形、ト書きやレシピの現在形等、必ずしも actuel であるとはいえず、発話時ないし moi-ici-maintenant を起点とする noncal とはいえないものが多々みられるのは周知のことである。SERBAT（1988）のように現在形は他の動詞形の守備範囲以外のいわば埋め草的な範囲を担当すると考えるべきであり、半過去形を現在形との類推でとらえ、両者は原則として共に actuel である点は共通しているが（現在形には前述のようにそうでないものも観察される）、現在形は原則として noncal であり、半過去形は純粋に toncal である点で対立していると考えられよう。

2）口頭発表時には「終結のファクター」と名付けられていたが、例文(5)、(7)のようにこのファクターの介入により半過去形の表わす事行が終結する場合のみならず、(6)のようにこのファクター介入後も半過去形の事行が存続する場合もあるので、「異質なファクター」と改められたようである。

3）ある文脈では確かに反実仮想を表わすが、別の文脈では単なる過去の描写や反復された事態を表わしうることは LE GOFFIC（1986）にも指摘されている。

4）春木の「認識空間」を筆者の概念で翻訳すれば「指示空間」に外ならない。

5）西南学院大学（福岡市）での春木の口頭発表時に、筆者はその点を口頭で指摘した。

6）$T_0$(Sit$_0$) の 0 の添え字は発話時、発話状況を表わす。

7）発話の主体（Sujet）、あるいは Locuteur の意である。

8）この考え方には疑問がある。筆者の素朴な語感では、家の購入という行為は $R_1(= t_1)$ でも $R_0(= t_2)$ でもない、より俯瞰的な視点から描かれていると思われる。

9）話者の意図により活性化された方の枝には2重矢印が付されている。

10）énonciateur、locuteur の区別についてはここで詳細に触れる余裕が無い。locuteur が物理的な発話者であるのに対し、énonciateur は様々な意味で発話に介入する主体であるとだけ述べておく。

11）LEBAUD 来日時（2000年冬）の筆者との個人的会話による。

12）hypocoristique の例の共発話者は十全な共発話者とはなりえない幼児やペットが通常であること、共発話者であるにもかかわらず通常3人称におかれることはつとに指摘されている。

13）この例でも共発話者たる客は3人称におかれている。この用法が真に敬意を表わしているか、ある仏語母語話者が疑問を呈したのは興味深い。一見逆の用法にみえる例(42) mépris の用法との類縁性を示していよう。

14）C'est la première fois que je *mangeais* le sushi. における半過去形の使用の理由も問題として依然残っている。

## Références bibliographiques

DAMOURETTE, J. & PICHON, E.(1911-1950)*Des mots à la pensée, Essai de grammaire de la langue française*, t.V., d'artrey.

DUCROT, O.(1979) «L'imparfait en français», *Linguistische Berichte*, 60, pp.1-23.

GREVISSE, M. & GOOSSE, A.(1993)*Le Bon Usage*, 13ᵉéd., Duculot, §851.

ICHIKAWA, M.(1999) «Sur l'imparfait dit hipocoristique», *Bungaku-bu Ronsô (Journal de la Faculté des Lettres)*, Cercle des Sciences Humaines de l'Université de Kumamoto, No.63, pp.1-3.

——— (2001)«Ah! qu'il était joli joli, mon petit Maurice ! — De l'imparfait hypocoristique à la fonction essentielle du tiroir →» *Bungaku-bu Ronsô (Journal de la Faculté des Lettres)*, Cercle des Sciences Humaines de l'Université de Kumamoto, No.71, pp.83-91.

IMBS, P.(1968)*L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.

LEBAUD, D.(1993)«L'imparfait: indétermination aspectuo-temporelle et changement de repère», *Le grê des langues*, 5, pp.160-176.

——— (1994)«L'imparfait, analyse linguistique en vue d'une conceptualisation en classe de FLE», *Le français langue étrangère à l'université théorie et pratique*, Actes du Colloque Internaitonal de Varsovie, 25-26 novembre 1993, Instytut Romanistyki, Uniwersytet Warszawski, pp.217-230.

——— (inédit) «Problème de morphologie verbale / Le paradigme *ais, ais, ait, ions, iez, aient*, cas de l'imparfait de l'indicatif», 18p.

LE GOFFIC, P.(1986) «Que l'imparfait n'est pas un temps du passé», *Points de vue sur l'imparfait*, Centre de publications de l'Université de Caen, pp.55-69.

SATO, F.(1990) «Sur l'imparfait «hypocoristique»», *Sur les verbes français*, Hakusuisha, pp.103-123.

SERBAT, G.(1988) «Le prétendu «présent» de l'indicatif: une forme non-déictique du verbe», *L'information grammaticale*, no.38, pp.32-35.

STEN, H.(1952)*Les temps du verbe fini(indicatif) en français moderne*. Ejnar Munksgaard, Kobenhavn.

WAGNER, R. L. & PINCHON, J.(1962)*Grammaire du français, classique et moderne*, Hachette.

WILMET, M.(1976)*Etudes de morpho-syntaxe verbale*, Klincksieck.

——— (1980) «Aspect grammatical, aspect sémantique, aspect lexical: un problème de limites», DAVID, J. & MARTIN, R.(éds.), *La notion d'aspect*, Klincksieck, pp. 51-68.

阿部　宏（1989）「je t'attendais 型の半過去について」、『フランス語学研究』、第23号、pp.55-59.

市川雅己（1983）「L'imparfait narratif（「物語の半過去」）について—通時的視点から—」、『筑波大学フランス語・フランス文学論集』第1号、pp.43-58.

——— (1988)「半過去の本質的機能について — 「物語の半過去」(imparfait narratif) を通して —」、『筑波大学フランス語・フランス文学論集』第5号、pp.81-93.

——— (1993)「紹介：時制記述の一枠組みについて — A. MOLENDIJK, *Le passé simple et l'imparfait: une approche reichenbachienne*」、『フランス語学研究』第27号、pp.68-72.

——— (1999)「紹介：半過去形の機能について」、『フランス語学研究』第33号、pp.65-69.

春木仁孝（2000）「J'ai rencontré un réfugié qui arrivait du Kosovo. — 半過去の属性付与機能について —」、『フランス語フランス文学研究』、第77号、pp.84-96.

前島和也（1977）「時制と人称：半過去の場合」『フランス語フランス文学』（慶應義塾大学日吉紀要）No. 25, pp.117-144.

（いちかわ　まさき・フランス語学）